# 郷土はんのう

第41号

飯能市指定文化財　「木造聖観音坐像」（善導寺所有）

## 目　次


◆加治村の誕生と入間川 ……尾崎康弘 2

◆身近な郷土史 ……久下文男 3

◆里神楽から生み出された祭囃子 ……和田　強 5

◆飯能の石橋と石橋供養塔 …… 加藤栄子 6

◆表紙の写真について …… 関根貴志 8

# 加治村の誕生と入間川
## ～飯能大橋が象徴するもの～

尾崎泰弘

### 1　近代自治体制の成立

飯能市域を構成している８つの地区、すなわち精明、加治、旧飯能、南高麗、原市場、名栗、東吾野、吾野は、いうまでもなく明治二二年四月に誕生した近代自治体制としての行政村にあたる。

埼玉県は、明治二一(一八八八)年四月の「町村制」の公布に伴い、町村合併の基本事項を定めた。それは、新町村の規模は三〇〇～五〇〇戸を標準とし、合併する場合は町村吏員や議員、惣代人などの意向を聴取すること、新市町村名は合併する町村の中で大きな町村名を用いることなどであった。そしてこれを元に合併見込案が作成された。多くの場合、明治一七年七月にできた連合戸長役場の区域が基準となった。

### 2　加治村誕生の際の地域間対立

加治村誕生の約半年前、明治二一年九月二日、高麗郡書記松原茂久は岩沢村連合戸長役場に出向き、惣代人、村会議員、重立を召喚して独立村(近代行政村)編制の諮問を行った。この前月矢颪村は飯能町への組み入れを企図し、岩淵村は加治村への合併を願い出ていた。しかし同日、郡書記松原に対し岩沢・笠縫・川寺・矢颪・前ヶ貫・阿須・落合の七ヶ村で加治村を組織することが上申された。

一方で役場の位置については一致を見ることができなかった。岩沢・阿須と笠縫の過半(仮に「東グループ」とする)は役場の位置を岩沢村としたのに対し、それ以外の四ヶ村と笠縫村の一部(「西グループ」とする)は川寺の役場設置を主張したのである。東グループの三ヶ村は、江戸時代を通じて領主がほぼ同じで、幕末には旗本金田貞之助の所領となっていた。一方西グループの方は、前ヶ貫とそこから分かれた矢颪村こそ江戸中期以降上総国久留里藩黒田領であったが、川寺村と落合村はそれぞれ幕府領と別の旗本の相給(一つの村を複数の領主で治めること)であった。また落合村はさらに成木川で隔てられていた。今のところ西グループの村々がまとまった理由はよくわからないが、この東西の対立は、合併後の学校統合問題(三つの分校が並立している状況の解消)にもつながっていく。

### 3　入間川に分断される加治村

そもそも加治村域は入間川によって地形的に分断されていた。矢颪に残っている記録を見ると、江戸時代の寛保二(一七四二)年から明治四三(一九一〇)年までに少なくとも二七回の水害に遭っている。平均すれば約六年に一回の割合となり、まさに水害の常襲地域であった。

また明治二二年四月に初代加治村長に就任した中村忠三九は、村長辞任後の明治二六年、入間川の存在が地域の一致団結を妨げているとし、道路橋梁の改修工事が不可欠との認識を示している。すなわち河岸段丘が発達したこの地域では、川を渡るには段丘から河原まで下りて橋を渡り、再び段丘を登らなければならない。また度重なる水害で橋が流されるため、物資の運搬や人の移動の点で大きな障害となっていたのである。

それにも関わらず入間川で隔てられた村々が合併を望んだ理由の一つに秣場(入会地)の存在が考えられる。加治丘陵を擁する阿須村には、谷ヶ貫(現入間市)に抜ける道の東側の山に岩沢・笠縫との、また今井(現青梅市)に近い西側の山林は、岩沢・笠縫・川寺・落合との入会地があった。秣場から刈り取った草は田畑に漉き込んだり、焼いて「草木灰」にするなど肥料を得る原資となっただけでなく、そこからは柴や薪などの燃料、屋根葺きの萱などを採取していたと考えられる。まとまった山林原野をもたない入間川北岸の村からすれば、入会地は農業中心の生活には不可欠の存在であった。

その後、中村忠三九は村内を通る三つの道路を、改修や橋梁工事に県の補助を受けられる補助道に編入する運動に邁進していく。村内にあった三つの学校が加治尋常小学校に統合されるのはそれから一六年後の明治四一年のことであった。

### むすびに

加治村は太平洋戦争さなかの昭和一八(一九四三)年に飯能町と合併する。戦後、絹織物業や林業といった地場産業が衰退していき、

飯能の町は東京のベッドタウンとなった。入間川の北側の地域では田畑が宅地に姿を変え人口が増加していった。入間川の南側は北斜面にあたるため開発は遅れていたが、昭和五八年に飯能南台土地区画整理事業の工事が始まり、平成元年に新たに美杉台と名付けられた街と飯能駅を結ぶ飯能大橋が開通した。

加治村誕生時の東西の対立とその原因を思う時、恐らく飯能で最も巨大で堅固な飯能大橋の存在は、それを克服したことを象徴しているかのようである。その完成は、加治村の誕生からちょうど百年後のことであった。

（飯能市立博物館館長）

〈参考文献〉
飯能市『飯能市史(資料編Ⅳ)行政一』　昭和五五(一九八〇)年一一月
飯能市教育委員会『名栗の歴史(下)』　平成二二(二〇一〇)年三月
白井哲哉・須田努編『地域の記録と記憶を問い直す』　平成二八(二〇一六)年四月

飯能大橋

## 身近な郷土史

久下　文男

自分の住んでいるところが昔どうであったかを知る資料の一つに「新編武蔵風土記稿」があると思います。私は南高麗地区の大字「下畑」に生まれ育っていますが、物心ついてから今までのことは自身の記憶にある訳ですが、生まれる前のことを知るためには文献を当たるしかありません。南高麗では「南高麗郷土史」が平成八年に編纂されていて、郷土の様子はこれを紐解けば、ほぼ分かります。今回ごく身近なところの屋号と小字名について紹介し、人々が使うことが無くなってしまうであろう事柄について触れてみます。

### 下畑の屋号

屋号は、敬称を付けずにその家を呼べるので便利です。昔は仕事も住むところも同じで集落に暮らす人々の結びつきは非常に強く、そこで行われている様々な職業も暮らしに密着していました。

屋号も職業・家業にちなんだものがほとんどです。豆腐屋 下駄屋 畳屋 くるま 店 新みせ まんじゅう屋 鍛冶屋 材木屋 よいと うすや 左官屋 花火屋 便利屋 十三文屋（じゅうさんもや）

これらの屋号がそこに住む人々から呼ばれるようになった時代は異なっているようです。「うすや」と呼ばれている屋号の家人に「臼」を作った道具などが残っていますか」と聞いてみたところ「一切ない」とのことでした。となるとかなり古くからそう呼ばれていたのかも知れませんし、臼を作っていたのでなく、臼で穀物を挽く生業だったのかも知れません。また「くるま」という屋号の家は、大八車でも作る仕事をしていたのかと思うとそうでなく、大きな水車があった家のようです。「よいと」と呼ばれている家は、代々建築大工の仕事をしていた家で、家を建てる時「よいとまけ」ではありませんが、地固めをするのでそう呼ばれていたようです。

一方、家のある場所、形態によって呼ばれている屋号もあります。谷津 わたっぱ 上 中 澤 石橋 道下 中島 山根

「谷津」と呼ばれている家は、現在「谷津」という地形に家が建っている訳ではないので、聞いて

下畑の空撮写真

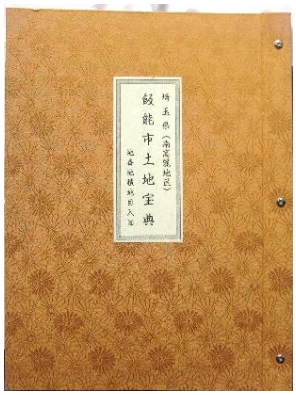
天保３年辰年 12 月下畑集落絵図

みたところ、谷津と言われる地形の所から昔引っ越したのだが、屋号がそのまま残ったとのことでした。「わたっぱ」の屋号は「渡し場」昔、下畑から都県境を流れる「成木川」から対岸に行くには橋が無く、渡し場があったので、その近くにある家なので「わたっぱ」という屋号なのです。

まだありますが、屋号も昔の暮らしの様子がわかる民俗なので、きちんと調べて記録しておきたいものと思います。

**下畑の小字（こあざ）**

「土地宝典」という便利な地図帳があります。大字、小字、地番、地目、面積（坪・㎡）が表記されています。昔からあったのですが、昭和60年3月に帝国地図というところが復刻しました。賛助員を募って頒布したようですが、下畑でもここに名を連ねているご家庭には所蔵されているはずです（17軒）



土地宝典

土地宝典を見ながら、大字下畑の小字名を紹介します。渡戸真土 渡戸原 保入 前 宮倉 宮原 伊野 間沢 保入沢 釜下沢 曽根 西ノ入 日向山 深久保 釜下 保入沢東 平 吹ヶ入 筧口 伊野間 宮ノ上 穴郷 穴郷御殿ヶ入

ひと昔前の地元の人はこの小字名を聞けばどこと直ぐわかったはずです。興味ある小字名いくつか。

「日向山」ここは確かにひなたなです。「筧口」＝「かけいぐち」と読むのだと思います「カケヒ」は長い竹を地上に掛け渡して、水を通すものですので、この字の所には水口があったのかも知れません。行ってみると確かに水の出そうな場所でした。それから「宮」が付くのが3つありますが、宮はお宮ですので神社が関係している可能性があり、それは「宮原」にある「八幡神社」のことと思え、現在でも丁重に祀られています。釜下（かました）は文字通り釜の下のような所。渡戸真土は「まつち」として土質の良い所ということになります。昔の人たちがいかに土

地を良く見つめていたかが分かります「小字から解き明かす郷土の地理」まとめてみたいテーマです。

（当会理事）

## 里神楽から生み出された祭囃子

和田　強

飯能祭りで私たちの耳になじんでいる祭囃子は江戸祭囃子の流れを汲んでいると思われます。ここでは、その江戸祭囃子の源が江戸で流行った里神楽にあるということを述べたいと思います。

里神楽は、神社の祭礼時に奉納される、神話を題材とした黙劇で構成される舞に囃子(神楽囃子)が伴った祭礼芸能です。

江戸における里神楽（いわゆる江戸里神楽）は、寛文～貞享年間（一六六一～八八年)頃に古い形の埼玉県の鷲宮神楽「土師の舞」が江戸に入って広まったとされます。もともとは神事舞を舞っていたものが、江戸に入った後の文化文政年間(一八〇四～三〇年)の頃に、江戸で興行した壬生狂言、能、歌舞伎などの影響を受けて独自に発展したと考えられます。賑やかな囃子、華麗な衣裳、道化、滑稽味を加えた洗練された所作などにより、演劇性、娯楽性を高め、庶民の人気を博し、隆盛をみました。

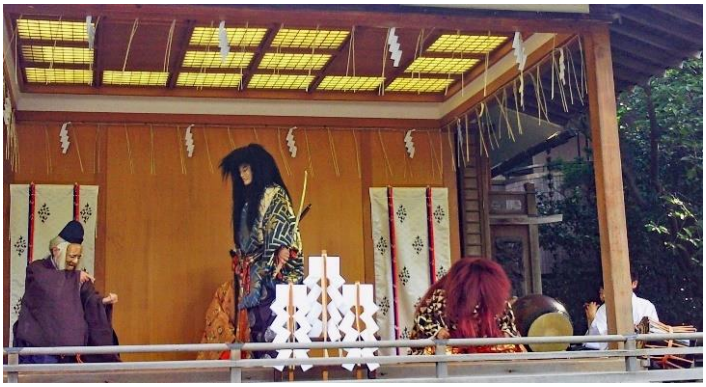
江戸市中には、諸大名の勧請した神社も含め神社の数が多く、それらの神社が一年に一度の大祭だけでなく、毎月の月次祭にも里神楽を奉納する習慣があったことや、さらに江戸には稲荷社が多く、その稲荷社の例祭にも里神楽が盛んに奉納されたことも神楽人気を支える土台となっています。

江戸市中においてこのような状況なのですから、近郷・周辺地域においてはおびただしい数の神社が存在するわけで、この江戸里神楽は、以後周辺地域に伝承されていき、里神楽の隆盛を現出することになります。

こうして演劇性・娯楽性に磨きをかけられた江戸里神楽は、地域を問わず、諸所の神社祭礼で興行され江戸庶民の心をとらえていたのです。

このようにして広まった里神楽は、江戸庶民の求めに沿うかたちで変化を遂げます。舞を支える神楽囃子がより軽快で、より華やかなものへと変化を遂げていきます。特に能管や篠笛による流麗、軽妙なメロディは太鼓と絡み人々を夢中にさせたことでしょう。そのうちに囃子だけを楽しむという動きや、自分たちも囃子を演奏してみたいと思う者が出てきても不自然ではありません。

そういうなかで、神楽師が地域の人々に神楽囃子を伝授することが行われるようになります。



「里神楽 若山社中（2011.8.6 住吉神社祭礼にて）

神楽師もまた、神楽興行の場とは別の場で、神楽囃子を演奏し、人々を楽しませることもあったのではないかと考えられます。

やがて、このようにして人々に好まれて演奏されていた神楽囃子に手が加えられ、さらに楽器編成も工夫され、より音楽的に洗練された新しい囃子が生まれることとなったのです。この囃子が江戸祭囃子です。

この江戸祭囃子の創始については、享保年間(一七一六～三六年)武州葛飾郡金町村(東京都葛飾区金町)の香取大明神の神主・能勢環が始めたという説がもっとも広く一般に流布しています。能勢環は音律を工夫創作し、これを「和歌ばやし」と名づけ村内の若者に教えました。その囃子を明神の祭礼にはもちろん、近郷近在の祭礼に同村の若者が出張し、神社の境内に屋台を設け拍子面白くはやしたて神霊を慰めたのが始まりで、「和歌ばやし」が転じて「馬鹿ばやし」になったのだといわれています。以降、天下泰平・国家安全の奉納囃子として江戸市中にまで大流行し各地の祭礼に用いられるようになりました。この囃子が、

後に「葛西囃子」と称されるのです。

葛飾区周辺で活躍した能勢環のほかに、西小松川村（東京都江戸川区小松川）鎮守の天祖神社神官・秋元式弥が、囃子連中を組織して江戸川に伝わる葛西囃子を近郷に奨励したことによって盛んになったということも伝えられています。

その後享保四（一七一九）年以来、関東代官・はこれを奨励し、毎年「葛西ばやし」代表者推薦会にて名人を選出、神田明神の祭礼で将軍上覧のもと演奏させたことから、急激に各地に伝播したともいわれています。

以上が葛西囃子誕生にかかわる伝承ですが、この葛西囃子を源流にして江戸市中及び周辺地域に大流行した囃子が江戸祭囃子なのです。そこから、次の点が浮かび上がってきます。それは、能勢環にしろ秋元式弥にしろ、両者が神職であったことです。ということは、両者が里神楽に携わっていたいわゆる神楽師であったことを物語っているのです。このことから里神楽の神楽師が神楽囃子をもとに祭囃子を創り出したこと及び囃子連を組織したこと、つまり、里神楽から祭囃子が生み出されたということが考えられるのです。

以上、愚見を述べさせていただきました。今後、また機会があれば、江戸祭囃子と里神楽の曲目、五人編成の囃子誕生とその魅力、江戸祭囃子と里神楽の交流などについて触れてみたいと思います。

（当会理事）

飯能まつり（2013.11.6）

## 飯能の石橋と石橋供養塔

加藤　栄子

平成十六年（二〇〇二年）に数え方によっては１０００にもなる飯能の橋を調査しました。途中、特に石橋と石橋供養塔に魅力を感じ、「橋梁台帳(橋のカルテ）にない橋」として調査を続けています。表でお分かりの様に飯能の石橋は、自然石や板状の石が３～５枚並ぶ桁橋と石を組んだ苅生の１基があります。残る飯能市で初めての立体交差となった日之出橋（上畑―下直竹の境い）の下「旧日之出橋」は調査途中です。

石橋の認定や知識に関しては、日本の石橋を守る会 中村まさあき氏と贄田（にえだ）岳和氏に引き続きご教授頂くことでしょう。

表中にお名前を掲載した方々と本会会員の久下文男氏、内野博司氏には、調査にご協力頂きましたこと、心より御礼申し上げます。また、参考となる資料を編集して下さった多くの皆様、加え『南高麗郷土史』（平成八年 南高麗郷土史研究会発行）には、詳細な橋の記載が多く、足元の力持ち、市民権のない橋たちを広い視野で記録して下さった事に感謝しております。

（当会監事）

芦苅場 小谷野家裏の石橋の石
寛政十年の銘文

清川橋下の石橋供養塔

| 所在地 | 橋名・架橋年 他<br>（橋名は呼称含む） | 石橋（幅×長さ×厚さ×枚数） 他 | 備 考 |
|---|---|---|---|
| 中峰<br>井上の子安<br>観音近く | **釈が橋** 読み不明<br>石橋勧化帳より<br>寶暦十二年午十月吉日<br>（1762 年） | 41×216×23cm×桁石４本<br>両側に宛（縁石）計６本の凹型<br>並列 石の中央部に膨らみ<br>平成の初め、縁石を倒し拡幅。 | 『東吾野郷土史』P178 石橋勧化帳<br>大野氏（屋号 石橋）：「はしか除け」に遠方からも親子が来た。橋の下をくぐる時、梯子を貸したらお菓子が貰えた。 |
| 飯能東谷路<br>（西武鉄道武蔵丘車両基地） | **木綿沢石橋**<br>寶暦十三年癸未歳正月吉日（1763 年） | 40×200×20cm×桁石３本<br>並列 ＊橋名は当時の取材から<br>馬頭観音は石橋方向を見ている。 | 『飯能の石仏』P161、246<br>正 馬頭観音、左 石橋供養塔、右 架橋年<br>丸山清氏：「ゆうのさわのいしばし」と呼んだ |
| 河原町<br>自治会館前 | 石橋供養塔のみ<br>正 石橋供粮塔<br>裏面 寛政九丁巳中秋吉日<br>（1797 年） | 旧岩根橋のところ 能仁寺参道の小川か？元石橋らしきサイズの石が、飯能河原水天宮近くの民家の軒先にあり。聞いたが不明の返答 | 『飯能の石仏』P165、250 左 左り聖徳太子みたけ道、右 右子のごんげんみち<br>横山健児氏：自治会館の靴脱ぎ石を起こすと文字が彫られていて驚いた。 |
| 中山三叉路<br>聖望学園、<br>水種稲荷近く | 石橋供養塔のみ<br>享和四甲子年（1804 年） | 北西方向に旧道で繋がる見返り坂や涙橋の記録がある。ただ、中山地区は堀が多いので特定は困難。 | 『吾妻天満宮本開帳記念誌』P23<br>『飯能の石仏』P166、250 正 南無遍照金剛左 熊谷坂戸道、右 所沢江戸道 石橋供養 |
| 中山<br>加治神社<br>境内に移動 | **観音橋と丹生橋**<br>明和五年（1768 年）<br>寛政三年（1791 年） | 明和五年 40×216×25cm×4 本<br>寛政三年 40×186×21cm×4 本<br>桁石 ＊明和五年が観音橋のよう | 中藤栄祥『武州高麗郡中山村記録 』<br>P235、236 石橋架設銘文（解説文付）<br>『吾妻天満宮本開帳記念誌』P25 |
| 中居<br>清泰寺入口 | 石橋供養塔のみ | 石橋は撤去し、墓地への階段として再利用した。 | 『飯能の石仏』P177、262<br>左 中居村□□吉日、右 願主観心 村中 |
| 青木交差点<br>西南角 | 石橋供養塔のみ | 交差点近くの住人によると近くの小川に架橋。場所は忘れた。 | 『飯能の石仏』P177、262<br>「石橋供」までしか読めず、「養塔」は地中。 |
| 元は<br>飯能第一<br>中学校校庭 | 桁石は所在不明<br>寛文九己酉年（1669 年）<br>S 氏記憶 | 昭和 19 年までは、校庭を流れる藤田堀（テニスコート近く）に架橋。<br>＊この頃は暗渠ではなかった。 | 双柳 S 氏：笠縫の島崎さんの寄付と聞いた。<br>外して双柳秀常寺へ運んだ。<br>秀常寺住職：長福寺墓地園に運び、不明 |
| 元は東飯能<br>駅構内 | **紺屋（こうや）橋**<br>＊屋号から | 構内を流れる藤田堀支流か？この辺りは、笠縫の稲荷原と呼んだ。 | 青木晃平氏：加治公民館隣に紺屋（こうや）という家があり、この家の人が架けた。 |
| 岩沢<br>白髪白山<br>神社境内 | 橋名不明<br>元文四年未九月<br>（1739年） | 40×185×26 ㎝ ２本 御影石<br>大正初期、武蔵野鉄道軌道施設工事の際、鳥居前の小川から撤去。 | 山崎修二氏『阿須ふるさと散歩』<br>西野長治氏手書き看板より： 桁石には「川賈代金以造立也」と彫られている。 |
| 笠縫<br>石橋3基 | **①榎戸 119 番地**<br>**②榎戸 145 番地**<br>**③新堀 233 番地** | ①1尺×4尺×4本 桁石<br>②1尺×6尺×4本 桁石<br>③約6尺 自然石かも | 調査 山崎修二氏<br>①②は笠縫正願寺の宝篋印塔を囲む<br>③は道路側面から覗くと僅かに見える |
| 前ケ貫<br>清川橋下<br>成木川左岸 | 石橋供養塔のみ<br>維持文化六己巳正月吉日<br>（1809 年） | 調査 山崎修二氏：清川橋下の水路に架橋されていた。<br>＊現在も水路（空堀）は在り。 | 『飯能の石仏』P147、238<br>正 石橋供（養）、左 高麗郡前・・以下欠損<br>＊清川橋工事完成まで別の場所に保管中 |
| 下畑<br>保入沢（ほにゅうさわ）<br>石橋2基 | **保入（ほのいり）橋**<br>寛政十三年（1801 年）<br>石橋供養塔は、白い卵型。<br>土手に半埋没 | 近くの秋葉大権現石・庚申塔に移動<br>自然石 100×220×30cm<br>自然石 85×140×30cm<br>桁石３本 38×240×18cm | 『飯能の石仏』P136、230<br>正 石橋供養塔、左 寛政十三年□□□<br>正月 施主下畠村 念佛講中 □は判読不可<br>＊橋名と小字読み『南高麗郷土史』参考 |
| 苅生<br>赤根ヶ峠道 | 橋名不明 明治時代<br>工兵の訓練で架橋 | 石造（自然石を組んだ）アーチ橋<br>水面から要石まで約 1. 2m | アーチ底をコンクリートで固定（後の補強か不明） 現在は崩れ始めていて、渡るのは危険。 |
| 上赤工畑中 | 寛政四壬子歳八月良辰<br>（1792 年） | 石橋、石橋供養塔共に現地確認できず。<br>＊どなたか情報を下さい | 『飯能の石仏』P125、221 |
| 芦苅場<br>小谷野家前 | 小谷野家の石橋<br>寛政十（1798 年） | 一般的な桁石が３枚残っている<br>トラックが通過して石橋が割れた | 奉□石橋□ 寛政十霜月□ 武州高麗 足苅場邑下分 ＊□は判読できない個所 |

## 表紙の写真について

関根　貴志

本像は、大字飯能に所在する松林山善導寺の観音堂の本尊です。飯能市内に多くみられる法衣垂下像の一例で、法光寺や金錫寺の地蔵菩薩坐像と作りが似ており、十四世紀後半の南北朝期の詫磨派系の鎌倉仏師の製作と推定されます。丁寧に結い上げられた宝髻、正面と背面で強くカーブを描く天冠台、どこか初々しさを見せる豊頬丸顔の少年の様な面貌、頭奥・体奥が厚く猫背気味の体躯、複雑で装飾的な衣文を刻む厚手の着衣等の彫刻表現は、宋元美術の影響を受けた後期宋風彫刻の特徴を十分に表しています。

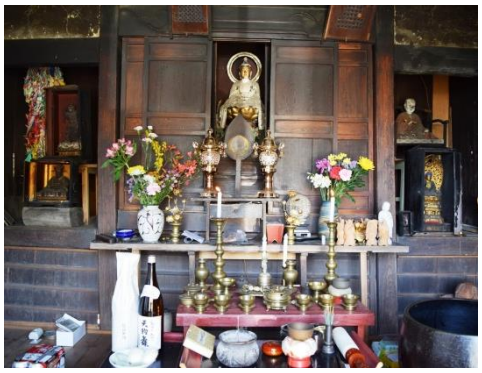
幾千代も松井久しく善道や
今も御法の誓い新たに

これは高麗坂東三十三観音の、十一番札所の御詠歌です。現在は入間市野田の円照寺が十一番ですが、昭和初期の頃までは善導寺が札所でした。善導寺は地主の持ち寺で、当時二代に渡り札所が続きましたが、その後に朱印等が円照寺に移管されたそうです。

御詠歌の歌詞にはその札所の山号寺号や所在地の名前を織り込むことが多く、この御詠歌にも地名（小字「松井戸」）や寺号が含まれていることからも、かつて善導寺が札所だったことが偲ばれます。

札所が移ってからも地元の人からは大事にされていて、ヨモギ摘みの時季にあたる四月中旬の祭りは途絶えたことがないとのこと。以前は杵と臼で搗いた草餅を振る舞ったことから「草餅観音」と呼ばれているそうです。

善導寺の嶌田住職はもともと市外在住でしたが、定年で飯能に戻る準備をしながらお堂の修理と僧籍を取得されたそうです。多峯主山の下山道に整備する計画もあるとのことで、多くの人が立ち寄る場所になってほしいと思います。



祭りの日（平成三十一年撮影）

参考資料


・「令和2年度新指定文化財（彫刻）について」（飯能市公式HP）（
・「草餅観音」加藤寛之
・「文化新聞」平成19年4月25日


（当会会員）

## 飯能郷土史研究会の活動

◎令和三年度事業報告

▽総会

・五月二十九日(土)

「あゝ振武軍」、「名栗川小唄」「雄気の人」について

講師　石井　英子氏

（飯能の"みんよう"保存会会長、当会理事）

▽郷土はんのう発行

・三月三十一日　四十一号

◎令和四年度事業計画

▽総会・例会　未定

▽郷土はんのう発行

・三月三十一日　四二号

**編集後記**　一昨年からのコロナ禍により、当会の活動も大きく制限を受けてきましたが今年度はなんとか「郷土はんのう」を発行することができました。原稿を寄稿いただいた博物館館長尾崎様・当会会員の方には、この場を借りて御礼を申し上げます。（関根）


郷土はんのう　第四十一号
発行日　令和四年三月三十一日
発行所　飯能郷土史研究会
〒357-0034 埼玉県飯能市東町三一一六（堀越方）
電話九七三―三三八一
題字　大野亮弘